

# 三尺角

泉鏡花

青空文庫



「……………」

山には木樵唄、水には船唄、驛路には馬子の唄、渠等はこれを以て心を慰め、勞を休め、我が身を忘れて屈託なく其業に服するので、恰も時計が動く毎にセコンドが鳴るやうなものであらう。また其がために勢を増し、力を得ることは、戦に鯨波を擧げるに齊しい、曳々と一齊に聲を合はせるトタンに、故郷も、妻子も、死も、時間も、愆も、未練も忘れるのである。

同じ道理で、坂は照るく鈴鹿は曇る〓といひ、拾遣りたや足袋添へて〓と唱へる場合には、いづれも疲を休めるのである、無益なものおもひを消すのである、寧ろ苦勞を紛らさうとするのである、憂を散じよう、戀を忘れよう、泣音を忍ばうとするのである。

それだから追分が何時でもあはれに感じらるゝ。つまる處、卑怯な、臆病な老人が念佛を唱へると大差はないので、語を換へて言へば、不殘、節をつけた不平の獨言である。

船頭、馬方、木樵、機業場の女工など、あるが中に、此の木挽は唄を謡はなかつた。其の木挽の與吉は、朝から晩まで、同じことをして木を挽いて居る、黙つて大鋸を以て巨材の許に跪いて、そして仰いで禮拜する如く、上から挽きおろし、挽きおろす。此度のは、一昨日の朝から懸つた仕事で、ハヤ其半を挽いた。丈四間半、小口三尺まはり四角な樟を眞二つに割らうとするので、與吉は十七の小腕だけれども、此業には長けて居た。

目鼻立の愛くるしい、罪の無い丸顔、五分刈に向鬚卷、三尺帯を前で結んで、南の字を大く染抜いた半被を着て居る、これは此處の大家の仕着で、挽いてる樟も其の持分。

未だ暑いから股引は穿かず、跣足で木屑の中についた膝、股、胸のあたりは色が白い。大柄だけれども肥つては居らぬ、ならば袴でも穿かして見たい。與吉が身體を入れようといふ家は、直間近で、一町ばかり行くと、袂に一本暴風雨で根返して横様になつたまゝ、半ば枯れて、半ば青々とした、あはれな銀杏の矮樹がある、橋が一個。其の濼色の橋を渡ると、岸から板を渡した船がある、板を渡つて、苦の中へ出入をするので、此船が與吉の住居。で干潮の時は見るも哀で、宛然洪水のあとの如く、何時棄てた世

帶道具よたいどうぐやら、缺挿鉢かけすりばちが黒く沈むで、蓬おどろのやうな水草みづくさは波なみの隨意まに／＼靡なびいて居ゐる。この  
 水草みづくさはまた年久としひさしく、船ふねの底そこ、舷ふなばたに擲なみ附ついて、恰あたも巖いはに苔蒸こけむしたかのやう、與吉よきちの家いへ  
 をしつかりと結ゆはへて放はなしさうにもしないが、大川おほかはから汐しほがさして來くれば、岸きしに茂しげつた柳やなぎ  
 の枝えだが水みづに潜くぐり、泥どろだらけな笹ささの葉はがびたくと洗あらはれて、底そこが見みえなくなり、水草みづくさの  
 隠かくれるに從したがうて、船ふねが浮うきあがると、堤防ていぼうの遠方をちかたにすく／＼立たつて白しろい煙けむりを吐はく此處こゝ彼  
 處しこの富家ふかの煙突えんとつが低ひくくなつて、水底みづそこの其その缺挿鉢かけすりばち、塵ちり芥あくた、檻樓切ぼろぎれ、釘くぎの折をれなど  
 は不殘形のこらぶたちを消けして、蒼あをい潮しほを満まん々と湛たへた溜池ためいけの小波さなみの上うへなる家は、掃除さうじをする  
 でもなしに美うつくしい。

爾時そのときは船ふねから陸りくへ渡わたした板いたが眞直まつすぐになる。これを渡わたつて、今朝けさは殆ほとんど満潮まんてうだつた  
 から、與吉よきちは柳やなぎの中で※と旭あさひがさす、黄金こがねのやうな光線くわうせんに、其罪そのみのない顔かほを照てらされ  
 て仕事しごとに出でた。

## 二

其それから日ひ一日いちにちおなじことをして働はたらいて、黄昏たそがれかゝると日ひが春うすづ、柳やなぎの葉はが力ちからなく低たれ

て水が暗うなると汐が退く、船が沈むで、板が斜めになるのを渡つて家に歸るので。

留守には、年寄つた腰の立たない與吉の爺々が一人で寝て居るが、老後の病で次第に弱るのであるから、急に容體の變るといふ憂慮はないけれども、與吉は雇はれ先で晝飯をまかなはれては、小休の間に毎日一度づつ、見舞に歸るのが例であつた。

「ぢやあ行つて來るぜ、父爺。」

與平といふ親仁は、涅槃に入つたやうな形で、胴の間に寝ながら、佛造つた額を上げて、汗だらけだけれども目の涼しい、息子が地藏眉の、愛くるしい、若い顔を見て、嬉しさうに頷いて、

「晩にや又柳屋の豆腐にしてくんねえよ。」

「あい、」といつて苦を潜つて這ふやうにして船から出た、與吉はづつと立つて板を渡つた。向うて筋違、角から二軒目に小さな柳の樹が一本、其の低い枝のしなやかに垂れた葉隠れに、一間口二枚の腰障子があつて、一枚には假名、一枚には眞名で豆腐と書いてある。柳の葉の翠を透かして、障子の紙は新しく白いが、秋が近いから、破れて煤けたのを貼替へたので、新規に出來た店ではない。柳屋は土地で老舗だけれども、手廣く商をするのではなく、八九十軒もあらう百軒足らずの此の部落だけを花主にして、今

代は喜藏といふ若い亭主が、自分で賣りにるばかりであるから、商に出た留守の、晝過は森として、柳の蔭に腰障子が閉まつて居る、樹の下、店の前から入口へ懸けて、地の窪むだ、泥濘を埋めるため、一面に貝殻が敷いてある、白いの、半分黒いの、薄紅、赤いのも交つて堆い。

隣屋はこの邊に棟を並ぶる木屋の大家で、軒、廂、屋根の上まで、犇と木材を積揃へた、眞中を分けて、空高い長方形の透間から凡そ三十疊も敷けようといふ店の片端が見える、其の木材の蔭になつて、日の光もあからさまには射さず、薄暗い、冷々とした店前に、帳場格子を控へて、年配の番頭が唯一人帳合をしてゐる。これが角屋敷で、折曲ると灰色をした道が一筋、電柱の著しく傾いたのが、前と後へ、別々に頭を掉つて奥深く立つて居る、鋼線が又半だるみをして、廂よりも低い處を、弱々と、斜めに、さもく衰へた形で、永代の方から長く續いて居るが、圖に描いて線を引くと、文明の程度が段々此方へ來るに従うて、屋根越に鈍ることが分るであらう。

單に電柱ばかりでない、鋼線ばかりでなく、橋の袂の銀杏の樹も、岸の柳も、豆腐屋の軒も、角家の堀も、それ等に限らず、あたりに見ゆるものは、門の柱も、石垣も、

皆傾いて居る、傾いて居る、傾いて居るが盡く一様な向にではなく、或ものは南の方へ、或ものは北の方へ、また西の方へ、東の方へ、てん／＼ばらく／＼になつて、此風のない、天の晴れた、曇のない、水面のそよ／＼とした、静かな、穏かな日中に處して、猶且つ暴風に揉まれ、揺らるゝ、其の瞬間の趣あり。ものの色もすべて褪せて、其灰色に鼠をさした湿地も、草も、樹も、一部落を蔽包むだ夥多しい材木も、材木の中を見え透く溜池の水の色も、一切、喪服を着けたやうで、果敢なく哀である。

## 三

界限の景色がそんなに沈鬱で、湿々として居るに従うて、住む者もまた高聲でものはをいはない。歩行にも内端で、俯向き勝で、豆腐屋も、八百屋も黙つて通る。風俗も派手でない、女の好も濃厚ではない、髪飾も赤いものは少なく、皆心するともなく、風土の喪に服して居るのであらう。

元來岸の柳の根は、家々の根太よりも高いのであるから、破風の上で、切々、蛙が鳴くのも、欄干の壞れた、板のはなれ／＼な、杭の抜けた三角形の橋の上



に蘆あしが茂しげつて、蟲むしがすだくのもの、船ふなむし蟲むらが群むらがつて往來わうらいを驅かけまはるのもの、工場こうぢやうの煙突えんとつの烟けむりが遙はるかに見えるものも、洲崎すさきへ通かよふ車の音おとがかたまつて響ひびくものも、二日ふつかおき三日みつか置きに思おもひだしたやうに巡査じゆんさが入はいるものも、けたましく郵便脚夫いうびんきやくふが走はし込りむものも、鳥からすが鳴なくのものも、皆何みなんとなく土地とちの末路まつろを示しめす、滅亡めつぼうの兆てうであるらしい。

けれども、滅ほろびるといつて、敢あへて此この部落ぶらくが無なくなるといふ意味いみではない、衰おとろへるといふ意味いみではない、人と家いへとは榮さかえるので、進歩しんぽするので、繁はんじやう昌じやうするので、やがて其電そのでん柱ちゆうは眞直まつすぐになり、鋼線はりがねは張はりを持ち、橋はしがペンキ塗ぬりになつて、黒塀くろべいが煉瓦れんぐわに換かはると、蛙かはつ、船蟲ふなむし、そんなものは、不殘のこらず石灰いしはひで殺ころされよう。即ち人すなはと家いへとは、榮さかえるので、恚か、景色けしきの俯おもかげなくならうとする、其その末路まつろを示しめして、滅亡めつぼうの兆てうを表あらはすので、詮せんずるに、蛇へびは進すすんで衣ころもを脱ぬぎ、蟬せみは榮さかえて殻からを棄すてる、人ひとと家いへとが、皆他みなたの光くわう榮えいあり、便利べんりあり、利益りえきある方面ほうめんに向むかつて脱出ぬけだした跡あとには、此地このちのかゝる俯おもかげ、空蟬うつせみになり脱ぬ殻からになつて了しまふのである。

敢あへて未來みらいのことはいはず、現げん在ざいに其その姿すがたになつて居ゐるのではないか、脱ぬけ出した或あ者ものは、鳴なき、且かつ飛とび、或あるもの者は、走はしり、且かつ食くらふ、けれども衣きぬを脱ぬいで出でた蛇へびは、殘のこした殻からより、必かならずしも美うつくしいものとはいはれない。

あゝ、まぼろしのなつかしい、空蟬のかやうな風土は、却つてうつくしいものを産す  
 のか、柳屋に艶麗な姿が見える。

與吉は父親に命ぜられて、心に留めて出たから、岸に上ると、思ふともなしに豆腐屋  
 に目を注いだ。

柳屋は浅間な住居、上框を背後にして、見通の四疊半の片端に、隣家で帳  
 合をする番頭と同一あたりの、柱に凭れ、袖をば胸のあたりで引き合はせて、浴衣  
 の袂を折返して、寢床の上に坐つた膝に搔卷を懸けて居る。背には綿の厚い、ふつく  
 りした、豎縞のちやん／＼を着た、鬱金木綿の裏が見えて襟脚が雪のやう、艶氣のな  
 い、赤熊のやうな、ばさ／＼した、餘るほどあるのを天神に結つて、浅黄の角絞  
 の手絡を弛う大きくかけたが、病氣であらう、弱々とした後姿。

見透の裏は小庭もなく、すぐ隣屋の物置で、此處にも犇々と材木が建重ねて  
 あるから、薄暗い中に、鮮麗な其淺黄の手絡と片頬の白いのが、拭込むだ柱に映つ  
 て、卜見ると露草が咲いたやうで、果敢なくも綺麗である。

與吉はよくも見ず、通りがかりに、

「今日は、」と、聲を掛けたが、フト引戻さるゝやうにして覗いて見た、心着くと、

自分が挨拶したつもりをんなの婦人はこの人ひとではない。

## 四

「居ゐない。」と呶つぶやが如ごとくにいつて、其そのまゝ通とほりぬ抜けようとする。

ト日ひがあたつて暖あたたかさうな、明あかるい腰障子こししやうじの内に、前刻さつきから静しづかに水みづを搔かきまはす氣勢けはひがして居ゐたが、ばつたりといつて、下駄げたの音おと。

「與吉よきちさん、仕事しごとにかい。」

と婀娜あだたる聲こゑ、障子しやうじを開あけて顔かほを出だした、水色みづいろの唐縮緬たうちりめんを引裂ひつぎいたまゝの襷たすき、玉たまのやうな腕かひなもあらはに、蜘蛛くもの圍ゐを絞しぼつた浴衣ゆかた、帯おびは占しめず、細紐ほそひもの態なりで裾すそを端折はしよつて、布ぬのの純じゆんぱく、白しろなのを、短みじかく脛はぎに掛かけて甲斐かひ々々／＼しい。

齒はを染そめた、面長おもながの、目鼻立めはなだちはつきりとした、眉まゆは落おとさぬ、束ね髪たばがみの中年増ちうどしま、喜き藏ざうの女房にようぼうで、お品しなといふ。

濡ぬれた手てを間近まぢかな柳やなぎの幹みきにかけて半身はんしんを出だした、お品しなは與吉よきちを見て微笑ほゝゑむだ。

土間どまは一面いちめんの日ひあたりで、盤臺はんたい、桶をけ、布巾ふきんなど、ありつたけのもの皆濡みなぬれたのに、

薄く陽炎のやうなのが立籠めて、豆腐がどんよりとして沈んだ、新木の太桶の水の色は、薄ら蒼く、柳の影が映つて居る。

「晩方又來るんだ。」

「お品は莞爾しながら、

「難有う存じます、」故と慇懃にいつた。

つか／＼と行懸けた與吉は、これを聞くと、あまり自分の素氣なかつたのに氣がついたか、小戻りして眞顔で、眼を一ツ瞬いて、

「え、毎度難有う存じます。」と、罪のない口の利きやうである。

「ほ、何をいつてるのさ。」

「何がよ。」

「だつてお前様はお客様ぢやあないかね、お客様なら私ん處の旦那だね、ですから、あの、毎度難有う存じます。」と柳に手を縫つて半身を伸出たまゝ、胸と顔を斜めにして、與吉の顔を差覗く。

「與吉は極の悪さうな趣で、

「お客様だつて、あの、私は木挽の小僧だもの。」

と手眞似で見せた、與吉は兩手を突出してぐつと引いた。

「かうやつて、かう挽いてるんだぜ、木挽の小僧だぜ。お前様はおかみさんだらう、柳屋のおかみさんぢやねえか、それ見ねえ、此方でお辭儀をしなけりやならないんだ。ねえ、」

「あれだ、」とお品は目を睜つて、

「まあ、勿體ないわねえ、私達に何のお前さん……」といひかけて、つく／＼瞻りながら、お品はづつと立つて、與吉に向ひ合ひ、其の襷懸けの綺麗な腕を、兩方大袈裟に振つて見せた。

「かうやつて威張つてお在よ。」

「威張らなくツたつて、何も、威張らなくツたつて構はないから、父爺が魚を食つてくれると可いけれど、」と何と思つたか與吉はうつむいて悄れたのである。

「何うしたんだね、又餘計に悪くなつたの。」と親切にも優しく眉を擡めて聞いた。

「餘計に悪くなつて堪るもんか、此節あ心持が快方だつていふけれど、え、魚氣を食はねえぢやあ、身體が弱るつていふのに、父爺はね、腥いものによ箸もつけねえで、豆腐でなくつちやあならねえツていふんだ。え、おかみさん、骨のある豆腐は出來ま

いか。」と思出したやうに唐突にいつた。

## 五

「おや、」

お品は與吉がいふことの餘り突拍子なのを、笑ふよりも先づ驚いたのである。

「ねえ、親方に聞いて見てくんねえ、出來さうなものだなあ。雁もどきツて、ほら、種々なものが入つた油揚があらあ、银杏だの、椎茸だの、あれだ、あの中へ、え、肴を入れて交ぜツこにするてえことあ不可ねえのかなあ。」

「そりや、お前さん。まあ、可いやね、聞いて見て置きませうよ。」

「あゝ、聞いて見てくんねえ、眞個に肴ツ氣が無くツちやあ、臺なし身體が弱るツていふんだもの。」

「何故父上は腥をお食りぢやあないのだね。」

與吉の眞面目なのに釣込まれて、笑ふことの出來なかつたお品は、到頭骨のある豆腐の注文を笑はずに聞き濟ました、そして眞顔で尋ねた。

「え、其何だつて、物をこそ言はねえけれど、目もあれば、口もある、それで生白い色をして、蒼いものもあるがね、煮られて皿の中に横になつた姿でえものは、魚々といひとくち一口にやあいふけれど、考へて見りやあ生身をぐつぐつ煮着けたのだ、尾頭のあるものの死骸だと思ふと、氣味が悪くツて食べられねえツて、左様いふんだ。

詰らねえことを父爺いふもんぢやあねえ、山中の爺婆でも鹽したのを食べるツてよ。煮たのが、心持が悪けりや、刺身にして食べないかツていふとね、身震をするんだぜ。刺身ツていやあ一寸試だ、鱈にすりやぶつぐ切か、あの又目口のついた天窗へ骨が繋つて肉が絡ひついて残る圖なんてものは、と厭な顔をするからね。あ、」といつて與吉は頷いた。これは力を入れて對手に其意を得させようとしたのである。

「左様ななかねえ、年紀の故もあらう、一ツは氣分だね、お前さん、そんなに厭がるものを無理に食べさせない方が可いよ、心持を悪くすりや身體のたしにもなんにもならないわねえ。」

「でも痩せるやうだから心配だもの。氣が着かないやうにして食べさせりや、胸を悪くすることもなからうからなあ、いまの豆腐の何よ。ソレ、」

「骨のあるがんもどきかい、ほ、ほ、ほ、」と笑つた、垢抜けのした顔に鐵漿を含んで

美しい。

片類に觸れた柳の葉先を、お品は其艶やかに黒い前齒で銜へて、扱くやうにして引斷つた。青い葉を、カチ／＼と二ツばかり噛むで手に取つて、掌に載せて見た。トタンに框のとツつきはしらもた、と二ツばかり噛むで手に取つて、掌に載せて見た。トタンに框の取着的の柱に凭れた淺黄の手絡が此方を見向く、うら少のと面を合はせた。

其時までは、殆ど自分で何をするかに心着いて居ないやう、無意識の間にして居たらしいが、フト目を留めて、俯向いて、じつと見て、又梢を仰いで、

「與吉さんのいふやうぢやあ、まあ、嗚此の葉も痛むこつたらうねえ。」

と微笑んで見せて、少いのが其清い目に留めると、くるりとつて、空ざまに手を上げた、お品はすつと立つて、しなやかに柳の幹を叩いたので、蜘蛛の巣の亂れた薄い色の浴衣の袂は、ひらひらと動いた。

與吉は半被の袖を搔合はせて、立つて見て居たが、急に振り返つて、

「さうだ。ぢやあ親方に聞いて見ておくんな。可いかい、」

「あゝ、可いとも、」といつて向直つて、お品は搔潜つて襷を脱した。斜めに袈裟になつて結目がすらりと下る。

「お邪魔申しました。」



「あれだよ。又、」と、莞爾にっこりしていふ。

「さうだつけな、うむ、此方こつちあお客きやくだぜ。」

與吉よきちは獨ひとりで領うしろむきいたが、背うしろむき向むきになつて、肱ひぢを張はつて、南なんの字じの印しるしが動うごく、半被はつびの袖そでをぐつと引ひいて、手てを掉ふつて、

「おかみさん、大威張おほあはりだ。」

「あばよ。」

## 六

「あい、」といひすてに、急いそぎ足あしで、與吉よきちは見みる内うちに間近まぢかな澁色しぶいろの橋はしの上うへを、黒くろい半被はつびで渡わたつた。眞中まんなか頃ごろで、向むかう岸がしから駈かけて來きた郵便脚夫いうびんきやくふと行合ゆきあつて、遣違やりちがひになつたが、分わかれて橋はしの兩端りやうはしへ、脚夫きやくふはつかくと間近まぢかに來きて、與吉よきちは彼かの、倒たふれながらに半被なかつびは黄きばんだ銀杏いんげんの影かげに小ちひさくなつた。

## 七

「郵便！」

「はい、」と柳の下で、洗髪のお品は、手足の眞黒な配達夫が、突當るやうに目の前に踏留まつて棒立になつて喚いたのに、驚いた顔をした。

「更科お柳さん、」

「手前でもでございます。」

お品は受取つて、青い状袋の上書をじつと見ながら、片手を垂れて前垂のさきを抓むで上げつゝ、素足に穿いた黒緒の下駄を揃へて立つたが、一寸翻して、裏の名を讀むと、顔の色が動いて、横目に框をすかして、片頬に笑を含むで、堪らないといったやうな聲で、

「柳ちゃん、来たよ！」といふが疾いか、横ざまに驅けて入る、柳腰、下駄が脱げて、足の裏が美しい。

與吉が仕事場の小屋に入ると、例の如く、直ぐ其まゝ材木の前に跪いて、鋸の柄に手を懸けた時、配達夫は、此處の前を横切つて、身を斜に、波に揺られて流るゝやうな足取りで、走り去つた。

與吉は見も遣らず、傍目も觸らないで挽きはじめる。

巨大なる此の樟を濡らさないために、板屋根を葺いた、小屋の高さは十丈もあらう、脚の着いた臺に寄せかけたのが突立つて、殆ど屋根裏に届くばかり。この根際に膝をついて、伸上つては挽き下ろし、伸上つては挽き下ろす、大鋸の齒は上下にあらはれて、兩手をかけた與吉の姿は、鋸よりも小さいかのやう。

小屋の中には單こればかりでなく、兩傍に堆く偉大な材木を積んであるが、其の高は與吉の丈より高いので、纔に鋸屑の降積つた上に、小さな身體一ツ入れるより他に餘地はない。で恰も材木の穴の底に跪いてるに過ぎないのである。

背後は突拔けの岸で、こゝにも地と一面な水が蒼く澄むで、ひたぐと小波の畝が絶えず間近う來る。往來傍には又岸に臨むで、果しなく組違へた材木が並べてあるが、二十三十づゝ、四ツ目形に、井筒形に、規律正しく、一定した距離を置いて、何處までも續いて居る、四ツ目の間を、井筒の彼方を、見え隠れに、ちらほら人が通るが、

皆黙つて歩行いて居るので。

淋い、森とした中に手拍子が揃つて、コツ／＼コツ／＼と、鐵槌の音のするのは、この小屋に並んだ、一棟、同一材木納屋の中で、三個の石屋が、石を鑿るのである。

板圍をして、横に長い、屋根の低い、濕つた暗い中で、働いて居るので、三人の石

屋も齊しく南屋に雇はれて居るのだけれども、渠等は與吉のやうなのではない、大工と

一所に、南屋の普請に懸つて居るので、ちやうど與吉の小屋と往來を隔てた眞向う

に、小さな普請小屋が、眞新しい、節穴だらけな、薄板で建つて居る、三方が圍

つたばかり、編むで繫いだ繩も見え、一杯の日當で、いきなり土の上へ白木の卓子

を一脚据ゑた、其上には大土瓶が一個、茶呑茶碗が七個八個。

後に置いた腰掛臺の上に、一人は匍匐になつて、肱を張つて長々と伸び、一人は

横ざまに手枕して股引穿いた脚を屈めて、天窗をくつつけ合つて大工が寝そべつて居

る。普請小屋と、花崗石の門柱を並べて扉が左右に開いて居る、門内の横手の格

子の前に、萌黄に塗つた中に南と白で抜いたポンプが据つて、其縁に釣棹と畚とがぶら

りと懸つて居る、眞にもの靜かな、大家の店前に人の氣勢もない。裏庭とおもふあた

り、遙か奥の方には、葉のやゝ枯れかゝつた葡萄棚が、影を倒にうつして、此處もおな

溜池で、門のあたりから間近な橋へかけて、透間もなく亂杭を打つて、數限もない材木を水のまゝに浸してあるが、彼處へ五本、此處へ六本、流寄つた形が判で印した如く、皆三方から三ツに固つて、水を三角形に區切つた、あたりは廣く、一面に早苗田のやうである。この上を、時々、ばらばらと雀が低う。

## 九

其他に此處で動いてるものは與吉が鋸に過ぎなかつた。

餘り靜かだから、しばらくして、又しばらくして、樟を挽く毎にぼろ／＼と落つる木屑が判然聞える。

(父親は何故魚を食べないのだらう、)とおもひながら膝をついて、伸上つて、鋸を手元に引いた。木屑は極めて細かく、極めて軽く、材木の一處から湧くやうになつて、肩にも胸にも膝の上にも降りかゝる。トタンに向うぎまに突出して腰を浮かした、鋸の音につれて、又時雨のやうな微な響が、寂寞とした巨材の一方から聞えた。

柄を握つて、挽きおろして、與吉は呼吸をついた。

(左様だ、魚の死骸だ、そして骨が頭に繋がつたまゝ、皿の中に残るのだ、)  
 と思ひながら、絶えず拍子にかゝつて、伸縮に身體の調子を取つて、手を働かす、  
 鋸が上下して、木屑がまた溢れて來る。

(何故だらう、これは鋸で挽く所爲だ、)と考へて、柳の葉が痛むといつたお品の言が胸  
 に浮ぶと、又木屑が胸にかゝつた。

與吉は薄暗い中に居る、材木と、材木を積上げた周圍は、杉の香、松の匂に包ま  
 れた穴の底で、目を睜つて、跪いて、鋸を握つて、空ぎまに仰いで見た。

樟の材木は斜めに立つて、屋根裏を漏れてちらくする日光に映つて、言ふべか  
 らざる森嚴な趣がある。この見上ぐるばかりな、これほどの丈のある樹はこの邊でつひ  
 ぞ見た事はない、橋の袂の銀杏は固より、岸の柳は皆短い、土手の松はいふまでもない、  
 はるかみ、そのずゑほとん、すゑめん、なら、

然も猶これは眞直に眞四角に切たもので、およそ恁る角の材木を得ようといふには、  
 杣が八人五日あまりも懸らねばならぬと聞く。

山から、山から、して來たのであることを聞いて居た。幽谷でなければならぬ。殊にこれは飛驒

一枝は蔓つて、谷に互り、葉は茂つて峰を蔽ひ、根はたゞ一山を絡つて居たらう。

其時は、其下蔭は矢張こんな暗かつたが、蒼空に日の照る時も、と然う思つて、根際に居た黒い半被を被た、可愛い顔の、小さな蟻のやうなものが、偉大なる材木を仰いだ時は、手足を縮めてぞつとしたが、

(父親は何うしてゐるだらう、)と考へついた。  
鋸は又動いて、

(左様だ、今頃は彌六親仁がいつもの通、筏を流して來て、あの、船の傍を漕いで通りすがりに、父上に聲をかけてくれる時分だ、)

と思はず振向いて池の方、うしろの水を見返つた。

溜池の眞中あたりを、頬冠した、色のあせた半被を着た、脊の低い親仁が、腰を曲げ、足を突張つて、長い棹を繰つて、晝の如く漕いで來る、筏は恰も人を乗せて、油の上を渡るやう。

するくと向うへ流れて、横ざまに近づいた、細い黒い毛脛を掠めて、蒼い水の上を鷗が弓形に大きく鮮かに飛んだ。

「與太坊、父爺は何事もねえよ。」と、池の眞中から聲を懸けて、おやぢは小屋の中を覗かうともせず、爪さきは小波を浴ぶるばかり沈むだ筏を棹さして、此時また中空から白い翼を翻して、ひらくくと落ちて来て、水に姿を宿したと思ふと、向うへ飛んで、鷗の去つた方へ、すらくと流して行く。

これは彌六といつて、與吉の父翁が年來の友達で、孝行な兒が仕事をしながら、病人を案じて居るのを知つて居るから、例として毎日今時分通りがかりに其消息を傳へるのである。與吉は安堵して又仕事にかゝつた。

(父親は何事もないが、何故魚を喰べないのだらう。左様だ、刺身は一寸だめしで、鱈はぶつぶつ切だ、魚の煮たのは、食べると肉がからみついたまゝ頭に繋つて、骨が残る、彼の皿の中の死骸に何うして箸がつけられようといつて身震をする、まつたくだ。そして魚ばかりではない、柳の葉も食切ると痛むのだ、)と思ひく、又この偉大なる樟の殆ど神聖に感じらるゝばかりな巨材を仰ぐ。

高い屋根は、森閑として日中薄暗い中に、ほの／＼と見える材木から又ばら／＼



と、ぱらりと、其處ともなく、鋸の屑が溢れて落ちるのを、思はず耳を澄まして聞いた。中央の木目から渦いて出るのが、池の小波のひたくと寄する音の中に、隣の納屋の石を切る響に交つて、繁つた葉と葉が擦合ふやうで、たとへば時雨の降るやうで、又無数の山蟻が谷の中を歩行く登音のやうである。

與吉はとみかうみて、肩のあたり、胸のあたり、膝の上、跪いてる足の間に落溜つた、堆い、木屑の積つたのを、樟の血でないかと思つてゾツとした。

今まで其上について暖だつた膝頭が冷々とする、身體が濡れはせぬかと疑つて、彼處此處袖襟を手で拊いて見た。仕事最中、こんな心持のしたことは始めてである。

與吉は、一人谷のドン底に居るやうで、心細くなつたから、見透かす如く日の光を仰いだ。薄い光線が屋根板の合目から洩れて、幽かに樟に映つたが、巨大なるこの材木は唯單に三尺角のみのものではなかつた。

與吉は天日を蔽ふ、葉の茂つた五抱もあらうといふ幹に注連繩を張つた樟の大樹の根に、恰も山の端と思ふ處に、しつきりなく降りかゝる翠の葉の中に、落ちて落ち重なる葉の上に、あたりは眞暗な處に、蟲よりも小な身體で、この大木の恰も其の注連繩の下あたりに鋸を突きして居るのに心着いて、恍惚として目を睜つたが、氣が遠くな

るやうだから、鋸を抜かうとすると、支へて、堅く食入つて、微かにも動かぬので、はつと思ふと、谷々々、峰々々、一陣轟！と渡る風の音に吃驚して、數千仞の谷底へ、眞倒に落ちたと思つて、小屋の中から轉がり出した。

「大變だ、大變だ。」

「あれ！ お聞き、」と涙聲で、枕も上らぬ寢床の上の露草の、がツくりとして仰向けの淋し素顔に紅を含んだ、白い頬に、蒼みのさした、うつくしい、妹の、ばさ／＼した天神鬚の崩れたのに、淺黄の手絡が解けかゝつて、透通るやうに眞白で細い頸を、膝の上に抱いて、抱占めながら、頬摺していつた。お品が片手にはしつかりと前刻の手紙を握つて居る。

「ねえ、ねえ、お聞きよ、あれ、柳ちゃん——柳ちゃん——しつかりおし。お手紙にも、そこらの材木に枝葉がさかえるやうなことがあつたら、夫婦に成つて遣るツて書いてあるぢやあないか。

親の爲だつて、何だつて、一旦他の人に身をお任せだもの、道理だよ。お前、お前、それで氣を落したんだけれど、命をかけて願つたものを、お前、其までに思ふものを、柳ちゃん、何だつてお見捨てなさるものかね、解つたかい、あれ、あれをお聞きよ。もう可

いよ。大丈夫だよ。願は叶ったよ。」

「大變だ、大變だ、材木が化けたんだぜ、小屋の材木に葉が茂つた、大變だ、枝が出來た。」

と普請小屋、材木納屋の前で叫び足らず、與吉は狂氣の如く大聲で、此家の前をも呼はつて歩行いたのである。

「ね、ね、柳ちやん——柳ちやん——」

うつとりと、目を開いて、ハヤ色の褪せた唇に微笑むで頷いた。人に血を吸はれたあはれな者の、將に死なんとする耳に、與吉は福音を傳へたのである、この與吉のやうなものでなければ、實際また憚る福音は傳へられなかつたのであらう。



# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 第四巻」岩波書店

1941（昭和16）年3月15日第1刷発行

1986（昭和61）年12月3日第3刷発行

※「！」の後の全角スペースの有り無しは底本通りにしました。

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年11月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 三尺角

## 泉鏡花

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>